

「信州 知の連携フォーラム(第4回)」参加報告

わがまち・わが館 お宝情報発信術 — 信州ナレッジスクエアの育て方 —

伊 東 洋 輔 (信州大学繊維学部図書館)
折 井 匡 (信州大学医学部図書館)
清 水 茜 (信州大学医学部図書館)
進 地 律 子 (信州大学医学部図書館)

1. はじめに

2020年9月28日(月)に「第4回 信州 知の連携フォーラム：わがまち・わが館 お宝情報発信術—信州ナレッジスクエアの育て方—」が開催された。

「信州 知の連携フォーラム」は、長野県における知と学びに関わる各種の文化施設(博物館、美術館、図書館、文書館などのいわゆる MLA)が、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策についてフロアを交えて語り合う場として、2016年に発足した。

第1回は2016年12月、第2回は2018年2月に信州大学中央図書館で開催され、県内文化施設の館長・部長らの講演やトークセッションが行われた。以降は県内の文化施設がリレー形式で企画・運営を担うこととなり、第3回は2019年3月に信州大学附属図書館が主催となって、寺院資料を題材に体験型のプログラムが行われた。

今回の第4回は県立長野図書館が主催となり、オンラインで7か所の会場をつないで講演とワークショップが実施され、全ての会場を合わせて91名が参加した。プログラムは以下のとおりである。

第1部 信州ナレッジスクエアを知る

第2部 「信州サーチ」の未来設計—これまで考えたこと、これからのこと—

講演 吉本 龍司 氏 (株式会社カーリル)

第3部 ワークショップ

分科会1 「信州サーチ」どう育てる? (会場 県立長野図書館・信州大学附属図書館)

分科会2 避けては通れない権利処理問題 (会場 県立長野図書館・信州大学附属図書館)

分科会3 発信するお宝を探そう (会場 塩尻市立図書館)

本稿では第4回フォーラムについて、信州大学附属図書館・塩尻市立図書館会場での参加者の視点より報告する。

2. 開催概要

2-1. 第1部 信州ナレッジスクエアを知る

第1部は、県立長野図書館の槌賀氏による信州ナレッジスクエアについての概要説明が、県立長野図書館から各会場にオンラインで配信された。

長野県は『しあわせ信州創造プラン2.0 学びと自治の力で拓く新時代：長野県総合5か年計画』にて「推進のエンジンとなる学びの推進」と「情報を探索・理解・選択し活用する力が必要」ということを謳っている。また第3次『長野県教育振興基本計画』では「共に学び合い、共に価値を創る『みんなの学び』を全県で活性化」「情報資産の蓄積、様々な主体が所有している情報の相互活用」「誰もが使える情報基盤の整備」を進めるとされている。こういった計画を受けて、誰もが広く信州に関する情報を入手できるための「信州の知の情報基盤」として、信州ナレッジスクエアが構築されたとのことであった。

信州ナレッジスクエアは「信州サーチ」「信州デジタルコモンズ」「想・IMAGINE・信州」「eReading 信州学」「信州ブックサーチ」の計5つのデジタルサービスから構成されており、検索の具体例を交えて各サービスの紹介がされた。

今回のフォーラムのテーマは「わがまち・わが館 お宝情報発信術」であるが、今後各館の所蔵するお宝（＝資料等）についてのデジタルアーカイブ作成を検討している施設については、「信州デジタルコモンズ」をプラットフォームとして使用する、または独自公開したアーカイブを「信州サーチ」で検索対象として登録する、といったことで発展の可能性が高まるとの提案があった。また、デジタルアーカイブを公開するにあたっては、著作権・肖像権・プライバシーの問題についての考慮が必要であり、公開の際には、公開ポリシーの設定や著作権等への配慮をした上での公開範囲・公開内容等の決定、及びそれらを利用者にとってわかりやすく表示をする必要があるとの説明がなされた。

2-2. 第2部 「信州サーチ」の未来設計 —これまで考えたこと、これからのこと—

第2部は、株式会社カーリルの吉本氏による「信州サーチ」についての講演が、カーリルの所在地である岐阜県から各会場にオンラインで配信された。

カーリルは全国約7300館の図書館の蔵書検索をするウェブサービスを提供しており、信州ナレッジスクエア構築のため「新たな図書館サービスに係る学術研究に関すること」「図書館サービスに関わる技術開発・運用に関すること」「構築された図書館サービスを他機関図書館に活用支援すること」について県立長野図書館と連携協定を結んでいる。

「信州サーチ」は信州ナレッジスクエアのサービスのうちのひとつである。吉本氏からは、「信州サーチ」では「信州ブックサーチ」のような図書だけの検索ではなく、『信州の検索』をできるようにしたいと考えているが、『信州（の文化・知識）の検索』とはどういうことなのか、についてはまだ理解しきれていないということが述べられた。情報（知識）について

の検索にはレベルがあり、ただ情報が存在していることが確認できるレベルの検索は当たり前前であるので、「信州サーチ」では再生産や新しい知識につながるレベルの検索を目指しているとのことである。

また、世の中の検索技術の動向について、今はワンボックス検索よりも、目的やニーズに合わせたスコアリングがされた「専門検索」が利用されるようになってきており、違う目的をもった情報を集めてもなかなかうまく機能しないので、もっと個々のニーズに応じた自由な検索になっていいとの説明がなされた。

今後について、今の技術やシステムでできることにこだわらず、何が検索できるべきなのかをカーリルだけではなく皆で一緒に考え、その結果を全国の MLA 機関に還元していきたい、そして「信州サーチ」があって当たり前前のインフラとなっていてほしい、ということであった。

2-3. ワークショップ

2-3-1. 分科会1「信州サーチ」どう育てる？

分科会1では、『信州サーチ』どう育てる？』をテーマに意見交換を行なった。

この分科会は県立長野図書館と信州大学附属図書館の2か所に分かれて実施されたが、本稿では、信州大学附属図書館中央図書館・工学部図書館・農学部図書館・繊維学部図書館をオンラインでつないで実施された、信州大学附属図書館での分科会について報告する。

参加者はすべて大学関係者であり、また時間も限られていたため、更にテーマを狭めて、「信州サーチへ実際に入れるコンテンツについて」と「検索結果の並び順について」の2点について、信州大学側の視点から意見を出し合うこととした。

1点目の「信州サーチへ実際に入れるコンテンツについて」は、どのようなコンテンツが入っていれば信州サーチがより豊かなものになるだろうか、という視点で意見を出し合ったところ、各館から様々なアイデアが提案されたが大きく3つに分類することができた。

1つ目は、大学史資料センターが各学部から収集した資料や同窓会誌などの「大学史資料および収集資料」に関するものである。肖像権の問題などが関わってくるため、実現は難しいと思われるが、農学部から提供した農学部創設期の卒業アルバムなどがみられると面白いのではないか、という意見が出た。

2つ目は、「図書館が作成した資料」である。例えば、作成したもののあまり活用されないままになっているパスファインダーや、過去の企画展示でのブックリスト、現在学内者のみが閲覧できるシステム eALPS にて公開している文献検索ガイダンスの資料などがこれに該当する。

3つ目は、「教員などが持っている公開済の研究データ」である。こちらについては「内容が長野県に関するもの」と、「発信元が長野県関係者であるもの」の2種類があると考えられるが、おそらく信州サーチの利用者は前者の資料を目的に検索していると想定されることから、これら2種類の情報のすみわけを考える必要も何れ出てくるだろう、という意見も出された。また、「自然科学館が持っている資料も検索できると面白いのではないか」という提案

もあった。

2点目の「検索結果の並び順について」は、信州サーチを検索サイトとして使いやすいものにしていくためにはどうしたらよいか、という視点で話し合いがなされた。現在の信州サーチは、絞り込み機能もなくワンボックス検索だが、将来的には検索結果上位10件以内に利用者のニーズにあった結果が表示されるようにしたいということから、絞り込みやソートができるとニーズにあった結果を表示できるのではないかと、という方向で話が進んだ。その上で、「検索の結果として表示された資料と、その他の資料との関係性やつながりが分かる形で表示される仕組みがあると、資料への理解が深まるのではないかと」「連想検索の機能があると便利だと思うので、記事にタグ付けなどをして見たらどうか」など、検索結果同士を関連させた表示への希望も出された。

2-3-2. 分科会2 避けては通れない権利処理問題

分科会2では、「避けては通れない権利処理問題」をテーマに、主に論文などを公開する際、文中に掲載した、著者以外が権利を持つ資料の処理について意見交換を行なった。

この分科会は県立長野図書館と信州大学附属図書館の2か所に分かれて実施されたが、本稿では、信州大学附属図書館中央図書館・工学部図書館・農学部図書館・繊維学部図書館をオンラインでつないで実施された、信州大学附属図書館での分科会について報告する。

テーマに即した具体例として、渡邊館長の執筆した論文を公開するにあたり、論文で取り扱った資料の所蔵者らに公開に関する了解を得る作業を中央図書館で実施したことが提示された。

資料の所蔵機関には、封書で許諾を求める文書を送付しており、懸念される返答の遅延や無回答は、返信用封筒を同封したことで回避された。

分科会参加者の中では、繊維学部で古い貴重資料を多数所蔵しており、学内から書籍等での利用希望が発生する。ある程度のフローチャートは存在するものの、利用希望に対応する部局はその時々でばらつきがある。

中央図書館が公開許諾を求めた機関の中では、個人や家族で運営している小規模な寺院等は代表者が直接対応し、職員が多数在籍し、係分けなどが可能な大学等では、図書館のように資料の運用に関わる部局が対応することが多かった。

ただし、繊維学部でも対応部局と実際に利用の可否を審議・決定する部局は異なる場合も多い。今回、中央図書館が公開許諾を依頼した中で、図書館等が対応した機関でも意思決定は別の部局が行なっている可能性は残る。

中央図書館の事例は、公開許可を求めるものであったが、繊維学部では、反対に許可を求められる事がある。この時の事務処理は学内でもほとんど共有していなかったため、この場で紹介した。なお、繊維学部所蔵の貴重資料は、図書資料ではないものも多く存在し、そのような物は学部が管理している。

前述の通り、利用希望に対応する部局はその時々で異なり、大きく分けて図書館か庶務係

が対応することが多い。意思決定は学部内の会議で行われるため、図書館や庶務係は、利用希望者との連絡役を担う形式となる。

大学が公に提供する情報というと機関リポジトリがある。機関リポジトリに掲載されている情報を、自著で引用したい、という外部の利用者にとってどのような障害が感じられるか、利用しやすくするためにはどのような取り組みが必要か、ということは情報提供の当事者としての課題として挙げられる。

一口に無料公開といっても、個々の資料について、引用などの利用は条件が異なる可能性もある。例えばクリエイティブ・コモンズを一つ一つの資料に付記するなど、既存の仕組みを活用することも考えられる。

このように、分科会内容は、事例報告や意見交換に終始し、本件は未だ萌芽の段階で、これから事例や検証を重ねていくものであることが伺えた。

2-3-3. 分科会3 発信するお宝を探そう

分科会3では、「発信するお宝を探そう」をテーマに意見交換を行なった。

この分科会は塩尻市立図書館にて、朝倉氏（県立長野図書館）の司会で、図書館職員と県立歴史館等からの参加者23名で行われた。

まず、現在各館で持っているお宝の現状報告があった。

- ・塩尻図書館数年前に市民から提供された古い写真と、市の広報部局が所有している写真数千枚をデジタル化した。データは図書館が所有している。1度図書館内で展示をした。気軽に写真を見てもらえるインフラが欲しい。展示は会場に訪れた人しか見ることができない。市民の写真に対するニーズがあると思うが、どのように市民に提供していけばいいのか考えている。

- ・県立歴史館は、大量の写真や文書等の資料を有しているが、デジタル化されていない。資金も人もいないので、やらなければいけないことはわかるが、できないのが現状。MLA連携の中で作業分担をしていけないか。

- ・下諏訪町立図書館は、昨年「みんなで作る下諏訪デジタルアルバム」を元気づくり支援金を獲得して、シルバー人材センターに協力してもらい、1500枚の写真を整理した。図書館では検索システムを構築できないので、博物館と連携を考えている。古い資料は集まるが、10年後を見据えて、今という現状をどう残していくのが課題。

- ・阿智村の「熊谷元一写真童画館」で所有している写真は、いつ・どこで・誰をとったメタデータが付いていて、学術研究ができる。図書館でも図書のように1つ1つの資料に件名をつけていく（アクセス・イントをつけていく）ことが、その後の利用につながる。

- ・飯田市立図書館は、郷土史家の市民から提供された写真を、ベテランの司書がタイトルを付け、データを管理している。このデータを図書館のホームページで見ることができるので、写真を見たい利用者が来館している。写真はデジタル化していない。

- ・伊那市立高遠町図書館では、古文書や古地図をデジタル化した際、自分たちがどう作りた

いか見せたいかを考えて構築した。それを見た地域の人から資料提供を受けるようになった。

・安曇野市立図書館では、資料収集の分担ができていて、写真や古文書などは博物館や文書館で収集しアーカイブ化している。図書館でも連携していけないか考えている。連携が充実すれば地域の情報も充実する可能性がある。

事例紹介の中で、いろいろな意見が出された。(順不同)

・資料の集中と統合の考え方があり、集めた物を、お金をかけて整理し公開するやり方から、今は各機関が持っているものを、横断的に検索することが求められている。集めたものはその機関が責任をもって公開しなくてはならない。図書館が集めることはせず、市民がそれぞれデータ化して公開したらどうか。

・資料を持っている人は高齢者が多く、市民個人がデジタル化することができない。

・市民が収集したものや、学校の授業の一環で調べたことなどを、できるものからデジタル化する過程で、仲介を図書館がするのはどうか。これを残したいという思いを助けてあげるのが公共図書館で、その結果として資料が集まってくる。またその過程で、地域の人たちを育成する情報リテラシーを、図書館が行うことになる。

・後世に残したいという地域の想いをどうすくい出すか。地域の人々の情報を発信したい、残したいという気持ちを育てることが今後は大切になる。

今回の分科会のまとめとして、司会者より次のような発言があった。

・自分の図書館に、どんなお宝が眠っているか、1度調べたらどうか。使われていないものがあるのではないか。お宝を作ることもできる。

・県立長野図書館では「どこコレ？ 信州篇」を開催したりしているので、各図書館のお手伝いをしたい。

最後に今回の討議の結果として、県立図書館のプラットフォームに塩尻市の資料を実装したらどうか、との提案があった。

参加してみて、多くの図書館で、図書以外の資料を集めている事を知ることができた。第2分科会で話されている権利処理問題が解決できれば、いろいろなお宝を居ながらに見ることができそうであると感じた。リモート開催の関係上、他の会場からの音声の質が悪く、設備については再考を希望したい。

2-3-4. 分科会まとめ

ワークショップは5か所に分かれて行われたため、各分科会の話し合い終了後、各会場をオンラインでつないでそれぞれの話し合いについての報告が行われた。

司会の篠田氏(県立長野図書館)からはこれからも皆で信州ナレッジスクエアを一緒に考えて作っていききたいとの話があった。

3. まとめ

「信州 知の連携フォーラム（第4回）」参加報告

新型コロナウイルスの流行により、今回は Zoom を併用しての開催となった。例年は業務の都合で出張が難しいような職員も、今年は参加できたのではないだろうか。遠隔での参加は新型コロナ終息後も一つの形態として根付いていくように思う。

今回のテーマは、大きくとらえると『信州サーチ』の今後について考える』という内容であった。いち図書館員としての個人的な感想であるが、システム担当者ではない図書館員が自館の蔵書検索システムや貸出システムだけではなく、横断検索ツールについてアイデアを出し合ったりできる時代になったのだ、ということに驚きを感じた。

カーリルの吉本氏の講演では「今は Google だけでは検索がもの足りないと感じる時代であり、Google の利用方法が『Google で検索して自分に適した検索サイトを探す』という使い方に変わりつつある。『信州サーチ』のようなものが求められる時代になってきている」「かつて検索は極めて高コストだったが、基礎技術の共有などが進み、現在は低コストで運用できるようになった」という話があったが、今、私達は検索システムの転換点にいるのかもしれない。

また、分科会 3 では、一般市民の所有する「わがまちのお宝」の公開のために図書館がどのような役割を担えるかが話題に挙がっていたが、直接来館してのサービスが制限される今、一般市民が直接図書館等に来ずとも MLA 機関を活用するために、信州ナレッジスクエアは大きな役割を果たすだろう。

今回のフォーラムは長野県立歴史館が主催となる。歴史館館長の笹本氏からは『物の説明』について、歴史館がどのようなことをやっているのか』というテーマで企画を進めている』という途中経過が報告され、フォーラムは閉会した。

本報告執筆分担

はじめに～第2部 清水 茜

分科会 1、まとめ 進地 律子

分科会 2 伊東 洋輔

分科会 3 折井 匡